

序

鹿児島県総合教育センター
所長 獅 子 目 博 文

本年度から、完全学校週5日制の下、新学習指導要領に基づく教育課程が実施されました。この教育課程の基本的なねらいは、生徒に学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容を確実に習得させるとともに、自ら学び自ら考える力などの生きる力を育成することです。

我が国の生徒については、国際的な調査等を基に、学力については高い成績を示しているものの、学習意欲が低いことや自宅での学習時間が少ないことが課題として挙げられています。

ここで思い出すのが、「学習」という言葉の由来となった『論語』の中の孔子の言葉です。学而篇の冒頭で「学びて時に之を習ふ、亦^{よろこ}説ばしからずや」と学ぶことと習うことの一体化、そこから生まれる問題解決の喜びを述べています。これからの学習指導においては、生徒たちが学習の喜びを味わうことができるよう、学習の動機付けなどを工夫しながら教育課程の基本的なねらいを達成することが必要です。

生徒たちの学習の動機付けを図る方策の一つが「評価」であると考えます。あるニットデザイナーは、今の自分に大きな影響を与えてくれたのは家庭科を教えてくれた先生であり、その先生がよく褒めてくれた、しかも工夫したところを必ず認めてくれたと述懐しております。そのことがきっかけで、もともと好きだった家庭科がますます好きになり、得意科目になったそうですから、先生の評価が学習を動機付けるとともに、自己実現にまでつながっていったと言えます。

本研究は、平成13年度から2年間にわたり、中学校の国語、社会、数学、理科、英語の必修教科に焦点を絞って、教科の学習指導における評価の在り方について取り組んできたものです。研究に当たって、平成14年度からは、鹿児島大学教育学部や鹿児島国際大学と連携するとともに、県下の中学校の先生方から研究協力員の参加を得て実践研究講座を開催し、研究が理論的にも実践的にもより深まるよう努めてまいりました。

ここに研究のまとめとして、これからの学習評価の在り方、評価規準や評価計画の作成など、評価の具体的な進め方、実証授業を通しての成果などを発表させていただきます。

この研究が中学校における教科の学習指導改善に生かされるとともに、小学校や高等学校でも活用され、指導と評価の一体化した学習指導により、基礎的・基本的な内容を確実に習得し、自ら学び自ら考える力などの生きる力を身に付けた児童生徒を育成する一助となれば幸いです。

平成15年3月